

## 令和6年産水稻の作柄・品質に影響した要因の解析

### 【概要】

令和6年産水稻は、分けつ盛期以降高温多照で推移したため、生育は旺盛で、穂数・ $m^2$ 粒数ともに平年並～やや多く、出穂期以降も高温で推移したことで、登熟が良好となり、作況指数は県全体で「106」の「良」となりました。また、令和5年より登熟初期の気温はやや低く、稲体の栄養状態も良好に保たれたことから、白未熟粒の発生率は低く、一等米比率は94.7%（令和6年12月31日現在）と前年を上回りました。

#### 1 出穂後の気温と玄米品質の関係

白未熟粒の発生と関係がある出穂後20日間の気温の平均は、令和6年は平年と比べると高く、白未熟粒が発生しやすい条件（最低気温22.5～23℃以上、平均気温26～27℃以上）でした。一方で、令和5年と比較するとやや低かったことから、白未熟粒の発生率は令和5年より低く、整粒率が向上しました（表1）。

#### 2 生育量と栄養状態の特徴

令和6年は、気温が高く推移したことに伴い、稲体の生育量も多くなりましたが、稲体の窒素吸収量は期間を通じて平年及び令和5年を上回り、適正な施肥により、登熟期の栄養状態が良好であったことが、白未熟粒の発生低減に寄与したものと推察しています（図1、表1）。

#### 3 次年度以降の対策

- (1) 気象変動下でも収量の安定化を図るのに、必要な穂数を確保するため、適正な栽植密度と植付本数を確保しましょう。
- (2) 登熟期間に高温が予想される場合は、生育量に基づいた適期追肥により、稲体の栄養状態を適正に維持し、玄米品質を確保しましょう。
- (3) 高温時は間断かんがいを基本とし、地温を下げるため夜間に入水するとともに、早期の落水を避け、適期刈取りに努めましょう。

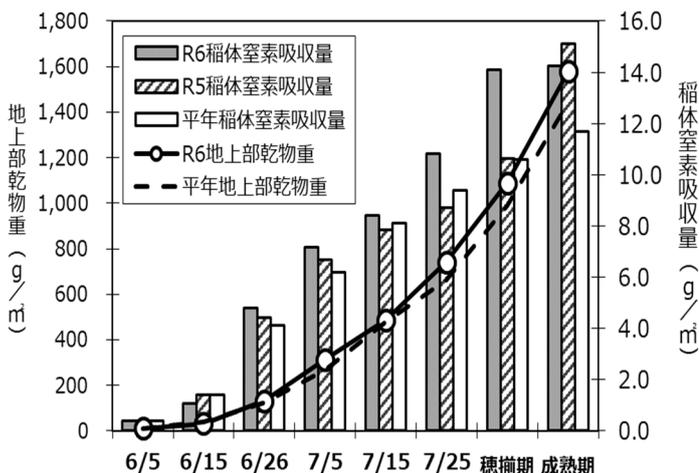


図1 地上部乾物重と稲体窒素吸収量の推移 (岩手農研、ひとめぼれ)

### 【試験データ等】

表1 出穂後20日間の気温と玄米品質の関係 (R5・R6)

調査年	気温 (°C : 出穂盛期～20日間平均)				構成粒比 (%)						
	最低	平均	最高	10日間	整粒	胴割粒	白未熟粒計	乳白	基部	腹背白	その他未熟
R5	23.4	27.1	32.3	33.3	54.1	2.4	28.9	13.6	10.2	5.1	10.0
R6	22.7	26.0	30.8	31.2	69.6	2.2	14.7	6.0	6.4	2.3	9.5
差 (R6-R5)	-0.7	-1.1	-1.5	-2.1	15.5	-0.2	-14.2	-7.7	-3.7	-2.8	-0.5
(参考) 岩手農研 作況ほ平年 銀河のしずく					70.5	3.6	10.5	4.9	3.7	1.8	10.5
(5/15頃移植 : R1～R5) ひとめぼれ					72.6	2.6	10.5	4.6	2.5	3.4	9.6

注) 生育診断予察ほ (各農業改良普及センター調べ) : 玄米品質及び気象 (近隣のアメダス値) の全品種・地点データ平均

【令和6年度成果】 令和6年岩手県産水稻の生育経過の特徴と作柄・品質に影響した要因の解析 (R6-指-01)